

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士／公認心理師）

金屋光彦

刑務所に入りたい、安心感喪失社会

— 子どもたちの自己肯定感を考える その5 —

1 家族の困惑

「こんなことをする子ではなく、信じられない。いっちゃんに会いたい」（祖母）

「まさに青天のへきれきで、自殺することはあってもまさか他殺するなんて思いもありませんでした。〈中略〉正義感があり、優しくった一朗が、一生かけても償えない罪を犯したことに、未だ困惑しています」（母親）

2 働く場に安心感がなくなった平成時代

1991年にバブルが崩壊し、2001年に誕生した小泉政権により、多様な働き方と国際競争力獲得の名の下、社員が容易にリストラされる時代となり、雇用の安定が失われた。それは、低賃金にあえぐ大量の非正規労働者（約400万人）と、成果主義の下、キャリアの見通しが無い中で過重な労働を強いられる正社員を生んだ。日常的に生活権を脅かされた労働者は、その7割近くが、強いストレスと大きな不安を抱え（厚生労働省「労働者健康状況調査」）ながら、生きる社会になっている。

3 犯行とその動機

「裁判で無期懲役になって、刑務所に入りたかった」

犯罪歴の全くない、心優しい小島一朗容疑者（22歳）のこの犯行動機に、彼の深い孤立感と絶望感を感じない人はいないだろう。事件は、2018年6月9日に起こった。彼は、東海道新幹線の車中で、座席両側の女性になたで切りつけ、止めに入った男性（38歳）を、殺害したのだ。

4 小島一朗容疑者のプロフィール

彼は、両親と姉と祖母の5人で愛知県一宮市で暮らしていた。が、中二の時、姉には新品、彼には古い水筒が与えられたのに立腹、包丁と金づちを親の寝室に投げ入れる事件を起こす。両親が警察に通報、彼は「新品の水筒をもらったお姉ちゃんとの差別に、腹が立った」と警察官に語ったという。5歳の時、発達障害（アスペルガー症候群、現在表記は自閉スペクトラム症）があると指摘され、両親は育てにくい子どもだったと語る。14歳の頃、彼自ら病院に行こうとしたが、薬代の高さから親は連れて行かなかったという。この頃、共働きの両親に代わり、祖母が食事作りをしたが、姉には作り彼の分は作らないことが度々あったとされる。

中学から不登校になり、自室でネットやアニメに浸る彼に困った両親は、自立支援施設に預けた。定時制高校

では成績優秀、本来4年修了のところを3年で卒業した。

「他の人とトラブルは全くなく、整理整頓が苦手なくらいで、手のかからない子でした」（施設代表のM氏）

自立支援施設では順調に成長し、定時制卒業後、職業訓練校で電気工事の資格も修得。19歳で埼玉県にある機械修理会社に就職した。職場でも「彼は理解力が高く、仕事も優秀で人間関係も問題はなかった」（当該社員）

しかし、1年後に愛媛工場に配転となり、そこで仕事を教えてもらえない等のいじめに遭い、退職する。その後彼は、母親の提案で、慕っていた母方の祖母宅に預けられ、この祖母と養子縁組をすることになる。が、彼は、祖母宅でも自室にこもりネットやゲームに没入する。祖父に生活態度を注意される度に、家出を繰り返した。彼の脳は、この時、理性や人間性を司る前頭前野の機能低下を招くゲーム脳になっていたのではないかと？ 昨年6月に世界保健機関が新たな疾病に加えたゲーム障害という依存症に、陥っていたと推測される。

5 依存症と甘えられない現代社会

依存症は家庭の問題といわれる。家庭は、安心の拠り所の基地として機能する。安心して甘えられない家庭環境に長期間置かれると、その補償として、ゲームや薬に依存し続けるのである。

自己肯定感も、親に甘えられる中から培われる。

「どんなに育てにくいお前でも、大切なわが子だ！」と受容され、抱きしめられる中で、「自分は自分でいいんだ」という基本的な自己肯定感が育っていく。一朗容疑者は、家出を繰り返す中で、「自分は生きていく価値がない」、「死にたい」等と吐露していたという。

最近、子ども達と会う中で感じるのは、親に対する異常な気遣いである。「親に迷惑をかけたくない」との言葉もよく耳にする。親に安心して甘えられないのである。

6 安心できる“守りの枠”はどこに？

まだ脆弱な青少年には、傷つき挫折した時に安心して還れる枠組が必要だ。その“守りの枠”が家庭である。だが、安心枠の要になるはずの父親や母親も、大切にされない労働現場で、疲弊している。

「刑務所に入りたかった！」。心優しかった彼のこの犯行動機。刑務所という閉じ込められた枠に、自ら入りたかった彼の絶望は、見捨てられ不安にかられがちなの今の自己愛社会、縁薄く安心を失った我々の有り様に向けられた、一つの警笛ともいえるだろう。